

へ書評

松葉祥一『哲学的なもの と政治的なもの』

開かれた現象学のために

青土社、二〇二〇年

共同体のアポリアを考えるために

亀井大輔

哲学と政治はどのような関係にあるのだろうか。ジャック・デリダは一九六八年のある有名な講演の冒頭で、「およそ一切の哲学討議会は必然的に一つの政治的な意味合いをもつ」（『哲学の余白・上』高橋允昭・藤本一勇訳、政法大学出版局、二〇〇七年、二〇〇頁）と述べた。デリダは、国際的な討議会の参加者が暗黙の前提とするべき「透明なエーテル」として「哲学言説の普遍性」があると述べたあとで、その普遍性が本質的に「或る一群の言語および「文化」に結びついてきた」ことを指摘している。デリダの発言から四〇年以上経過した現在、両者の関係性はますます顕在化していて、自らの属する状況についての反省なしに哲学をすることは難しい。われわれは哲学が普遍性を求めたり、普遍性を標榜したりすること、哲学が必然的にある一定の歴史的、文化的、政治的な状況に結びついているこ

との、どちらか一方を脇におくことはできないし、どちらか一方に無自覚であることもできないだろう。

しかしだからといって、普遍性へのかかわりを完全に手放して政治的な諸概念を哲学的に問い続けることも重要ではない。政治的な諸概念を哲学的に問い続けることも重要である。というのも、哲学が政治的な状況とのかかわりのうちにあるのと同様、政治的なものの哲学的な前提を問い直す必要があるからである。たとえば政治的な言説の中で用いられる「共同体」という概念は、自己と、それとの異他性によって定義される他者という二項の間に、何らかの共通性があることによって成り立つものであり、それ自体のうちに解消不可能なアポリアを含む概念であることが、哲学的思考によって暴露されるだろう。本書がまさに提起するように、哲学と政治のどちらか一方を捨象す

ることなく、「哲学的なもの」と「政治的なもの」の関係を問
い直すことが、哲学にとって重要な課題となるはずである。

本書は、このような課題を早くから自覚し、哲学と政治との
関係を問うてきた著者、松葉祥一氏による初めての著作である。
著者は、日本のメルローポンティ研究において中心的な役割を
果たすとともに、一九九〇年代以降現在に至るまで、デリダや
ジャン＝リュック・ナンシーなどのフランス現代思想、さらには
エティエンヌ・バリバル、ジャック・ランシエールなどの
政治哲学についての気鋭の論客として、また精力的な翻訳者として
日本への導入に大きな役割を果たしてきた。本書は、これ
までに著者が発表した膨大な数の論考の中から、「個人の自由
と、他者との共存をどのように両立させるか」と言う問題（一〇
〇頁）、さらにそこから生じる「新たな共同性はいかにして可
能か」（二六頁）という問いを軸にして集められた一四編の論
考で構成されている。筆者の多方面での活動はこの一書だけで
は汲みつくされないが、本書によって、少なくともその主要な
軌跡が書籍として手に取ることができるようになった。その意
味で本書の出版はたいへん意義のあることである（なお著者には、
残念ながら本書に収録されなかった重要な論考も多くあるが、
その一部は『哲学者たちの戦争』（仮）として公刊が予告されている。
戦争という究極の政治的状况における哲学者の思考についての議論
が、そこでは纏められるようなので、待望したい）。

本書の全体を概観しておこう。本書は四つのパートから成つ

ている。「I 政治的ものの現象学——メルローポンティを
読む」には、著者が探査した一九四〇年代の未公刊草稿群を主
なテキストにして、メルローポンティにおける他者、自由、歴
史、暴力の問題を論じる四編が収録されている。これらの四編
は、それぞれのテーマで「個人の自由」と「他者との共存」を
問う。さらに共通点としてあるのは、二項の単なる混合物（悪
しき両義性）ではない積極的なものとして、メルローポンティ
の両義性の思考を打ち出している点である。

しかし著者の述懐によれば（二三頁）、やがてメルローポン
ティのテキストに即して議論を進めることに限界を見出したと
いう。そこで、メルローポンティからは距離をとり、さまざま
な思想家を対話相手として自由や共存の問題を追求することに
なる。その経緯からすれば、「II 哲学的なものゝ政治的なもの」
は、哲学と政治の関係についての著者の態度表明として読
むことができるだろう。そこでは、前述したように普遍的な真
理を志向する哲学と、相対的な価値であらざるをえない政治と
の関係が問われている。そこで著者が表明するのは、普遍的な
真理を退け、価値の多様性を前提とすること、価値の多様性を
認めることのみを唯一のルールとして設定すること、という立
場である。もし価値同士に係争が生じるならば、それについて
新たな判断をそのつど模索する必要がある。このような立場の
困難さを認めつつも、それを引き受けることしかないのではな
いかと結論づけている。

こうした立場からの政治哲学的な探求の「実践」(一六頁)と位置づけられるのが、「III 隷属知の解放のために」の四編である。そこでは、フーコーの監獄情報グループ、パリバールやデリダのサンバビエ支援活動、ランシエールのデモクラシー論、ドゥルーズの管理社会論が論じられる。これらの議論は、哲学者が実際の政治的問題にかかわったものである点で共通する。さらにその視点から、日本における監獄制度、移民問題、憲法改定や住基ネットワークなど、同様の問題への発言も含んでおり、日本の政治的状况に対する鋭い問題提起の章ともなっている。

最後の「IV 〈肉の共同体〉へ」は、「共同体」をテーマにした四編の論文を集める。そこで論じられるのは、サルトル、ナンシー、デリダ、そして再びメルロピオンティである。本書のテーマである「新たな共同性」についての問いがここで展開される。その四編の議論において浮かびあがってくる「共同体なき共同体」というアイディアが、新たな共同体として提起されている。とくに最後のメルロピオンティ論は、国家の形象でもある「身体」を「肉」の概念によって捉え直し、自己と他者との「共同性なき共同性」を「肉の共同体」として構想する論考である。メルロピオンティ研究から出発し、「メルロピオンティに他者はいない」という批判に対する答えを探し求めた著者の、現段階での到達点だと言えるだろう。

以上述べたように、本書がその議論を通じて結論的に提示す

るのは「共同性なき共同体」(communauté sans communauté)という新たな共同体の形象である。とはいえ、モリス・ブランショに由来するような「XなきX」のかたちをとるこうした表現は、容易に思考の像を結ぶものではないだろう。デリダ自身も「狂気の言葉遣い」(『友愛のポリティックス』鶴飼哲・大西雅一郎・松葉祥一訳、みすず書房、二〇〇三年、七五頁)と呼ぶように、この表現は確かに概念としては自己矛盾しており、思考困難なものである。そのため、本書のような議論は——そもそも本書が議論の対象とするフランス現代思想一般は——、われわれの政治的状况に対する実践的な提案を何も含まないような、抽象的な思弁にすぎないという批判も、政治哲学の中にはもしかしたらあるかもしれない。

しかしそのような意見に対して強調すべきなのは、「共同性なき共同体」という形象が表すのは単なる矛盾ではなく、自己性と他者性と同時に可能であるような、共同体というものが、自己が有するアポリアだ、ということだろう。自己と他者とは「ともに」あることを哲学的に考えるとき、このアポリアにさまざまなかたちで否応なく直面するはずであり、それを回避することなく思考することが要請されるはずである。

また、それは同時に、「共同性なき共同体」のアイディアが提示されたことで、新たな共同体への問いに対する決定的な答えが得られたわけではないということでもある。著者も述べているように、この問いは「まだまだ途中経過であり、一つの問

いでしかない」（三一―九頁）。だとすれば、本書の問いをさらに問い続けることが可能なはずである。むしろそうすることが、本書を最も真摯に受け止めることになるのではないか。評者自身の関心からすれば、本書第一三章「共同性なき共同体」は「可能か」で問われているデリダの共同体とのかかわりについて、もう少し問いを続けてみたくなる。そこで、「共同体」についての問いを継続するための小さなきっかけとなることを期待して、思いつくままに以下で若干の指摘をしたい。

この章において著者は、一貫して共同体概念への不信を表明するデリダに「共同性なき共同体」の可能性を見て取っている。著者によれば、デリダは「ブランショとナンシーの共同体概念をも退ける」のだが、「しかし、デリダは、ブランショ・ナンシーの言う共同性を前提にしない共同体の可能性そのものを否定しているわけではない。（…）それ「絆なき絆」にもとづく共同体の可能性を認めているのである。」「デリダは、伝統的な共同体概念に反発しながら、この概念の新たな可能性を退けていないように思える。つまり、「最小の友愛」にもとづく共同体、「共同性なき共同体」、歓待にもとづく共同体である」（二九〇頁以下）。著者の判断するように、確かにデリダは「共同性なき共同体」の可能性を否定しない。しかし、この共同体の可能性を留保しつつも、デリダはそれを共同体の概念を用いて論じることにはないのである。このようにデリダと共同体との関係は複雑であり、そこには問うべきことがまだ残されているよ

うに思われる。ここでは次の三点を挙げたい。

(1) 共同体と自己免疫の問題。デリダはある論考で、共同体が有する自己免疫の働きについて語っている。自己免疫とは、生命体が他者に対して自己を保護するため与える免疫が、当の生命体自身を破壊してしまうというプロセスであり、デリダが次第に活用するようになった概念である。「共―同―自己―免疫性 (com-mune auto-immunité) としての共同体。共同体自身の自己免疫性を維持しておらず、自己防衛の原理（手つかずの自己の完全さを保持するという原理）を破る自己破壊の原理を維持していないような共同体は、一つもない」（「信仰と知」松葉祥一・榊原達哉訳、『批評空間Ⅱ』一二号、一九九六年、大田出版、一七三頁）。したがって、共同体が他者の排除へと変わる恐れと、内部から破壊する恐れは、共同体にとって本質的なものだろう。「共同性なき共同体」もやはり共同体であるかぎりで、それを免れることができるだろうか。

(2) 共同体か「ともに」か。デリダ自身は「共同体」という語に頼ることを拒むが、まぎれもなく彼は他者との共存について思考し続けていた。ではどのように共存を思考すればよいか。これについて、デリダの死後になされたナンシーの発言を参照したい。「分割Ⅱ共有」(parçage) にもとづく共同体の思想家として本書で論じられたナンシーも、デリダが共同体概念を好んでいなかったことを指摘し、ナンシー自身も「共同体」という語を次第に用いなくなった、ということ述べている。

「共同体」にかんしては、私はついにその両義性を認めなければならぬようになりました。そして今日の「共同体主義」はどれも、それを取り戻すよう私に勇気づけることはなかったのです！ そんなわけで私はついに、ともにあること (Being with) という言葉遣いを好むようになりました、そしてデリダ自身は、ともに [avec] という言葉遣いに同意しました。」(Lorenzo Fabbrì, "Philosophy as Chance: An Interview with Jean-Luc Nancy", tr. by Pascale-Anne Brault and Michael Naas, in: *Critical Inquiry*, vol. 33-2, The University of Chicago Press, 2007, p. 433.) この発言のように、他者との共存を「共同体」ではなく「ともに」という表現で捉えなおすことによって、どのような変化がもたらされるだろうか。

(3) 共同体と欲待の連関。本書にも登場する、ハリバールは、共同体の条件であるべき友愛と、欲待との違いを示唆している。友愛が、「二者から一者をつくる」あるいは「一者になりつつ二者にとどまる」可能性にかかわるのに対し、欲待は「定義上同じにならない、あるいは自己に「同化」されない」異邦人そのものとかかわる。ハリバールは、古典期に *communitas* (*communauté* の語源) と釣り合っていた *commercium* (*commerce* の語源) という語を想起して、共同体の問題はこの二つの側面(内部からの他者と外部からの他者)から考える必要がある、*επιπέδη* (Etienne Balibar, "Derrida and The "Aporia of the Community"", in: *Philosophy Today*, vol. 53, suppl., 2009, p. 14f.)°

デリダの共同体の問題と欲待の問題とを連関させることで、ハリバールも指摘するように「来たるべき民主主義」のより広範な議論へと接続するだろう。

これらの論点を含めたさまざまな視点から、本書が切り開く共同体の問いは議論が継続できると思われる。もちろん、新たな共同体の問題について、著者自身も今後の方向性を示すことを忘れていない。それは、メルローポンティの「肉の共同体」と、ランシェールの「感性的なもの」の議論とを重ねあわせる方向である(二五頁)。そのような試みもまた、「コミュニケーション可能な他者」にとどまらず「絶対的他者」へと開くような欲待の議論と、さらには来たるべき民主主義の議論と、交差するものとなるだろう。

(かめい だいすけ・立命館大学)